

源氏物語々釈

二

源氏物語語釈二之卷

○若紫卷語釈

しじこらかし 初丁オ（翻刻四ページ）**雅集**「梁塵秘抄・口伝集十」おこりごちにわづらひてしじこらかしてありけるに」

新凝かたまる也。「うたて」は、せんかたなき也。右のごとく、なまなまのまじなひなどを為しこらかしては、瘡の忘れがたくして、いかにともせんかたなく成るもの也

釈「新釈の說、「為し凝かして」といはれたるは、わろし。頭書にいへるごとく、縮み凝る意の語なるを、活かして「凝かして」とはいへる也。「うたて」は、いよいよわるくなる意なり。

ならひ給はば 同ウ（翻刻五ページ）**釈**すべて「ならふ」は、馴といふ語を活かしたる也。物学ぶを習ふといふも、たびたび物して其事に馴るをいふ意也。こも源氏君はかやうの山道などの歩行も馴給はぬ故に、めづらしうおもほす也。みなこれに准へて知べし。

所せき御身にて 同（翻刻五ページ）**細**「河海云「ひろき心也云々」。誤歟。只せばき心也。御ありきなどかるがろしくはなきさま也。

釈此詞、末はさまざまにつかひたれど、何れも所狭の意より転りたる也。ここは、源氏君は貴き御身にて、下さまのものとごとくにまかせてそぞろありきもえし給はぬを、「所狭御身」といへる也。俗にキウクツナ、バセマナなどいふにあたれり。又、所によりては、河海にいはれたるごとく、ひろき心にいへるもあり。それは、其物事の広くなりて余地の狭くなれる意にて所狭とはいへる也。転れる末に心をつけて見るべし。皆所狭の意となる也。

ひじり 同（翻刻五ページ）**釈**此詞、もとは皇国の天皇の御事を称奉れ

この六年あまりがほど、中風にて手をやみたりければ、板下をかく事だにえせず。源氏の評釈たえむとする事、いとうれはしく、かなしかりけり。これによりて、さきに彫せつるちうさくをものして、まづかくなん五巻の草紙とはなしたる。語釈をも別にせんとおもひしかど、はつかばかりのほどなれば、ついでにここにとりそへつ。次の巻々よりは人の手にかかしたれば、いたうかはりたるになん。

文久のはじめの年が月

左ながらに

広道

しるす

るにて、日知の意なり。さるは、天皇は天照大御神の御子として、天津日嗣を知しめせば、高光日の御子など申たる意にて、日知とはいひしにこそ。然るに、漢国にて王の徳あるをば聖人といふをもて、日知に聖字を充たるより転りて、後にはひじりとは聖をいふことのごとなれども、其もとはいたく異なる事にて、よくも充らぬ字としるべし。さてまた、法師の徳行至れるにも、又此字を借て聖人といへりしより、つひには行徳ある僧をいふ名のやうになれりしなるべし。されども、僧は位あるものならねば、いよいよたがへる事となれるうへに、いともかしこくまがまがしきことといふべし。今世にはますます転りて、乞丐僧を殊にひじりといへるなどは、いはんかたなくかしこき事也。さてこなるひじりは、行徳ある僧の事なり。

大とこ 二丁オ（翻刻五ページ）**余**「釈氏要覽曰「僧史略云、即唐代宗大曆六年四月五日、勅京城僧尼、臨檀大徳、各置十人。以爲常式。此帶臨檀、而有大徳二字。以爲始也。僧輝記云、行滿徳高曰大徳」。

すかせ奉る 同（翻刻五ページ）**河**「すかせ」は、のまする也。世俗に「飲いるる」を「すきいるる」といふ也。

箋食字、吸ふ心也。「松の葉をすきて」などいふにおなじ。

拾「日本紀第二十四皇極紀」云「以水送飯」。うつほ物語に「松の葉をすきて」といへり。

余契説のうつほは、あて宮の事也。

ゆほびか 四丁オ（翻刻八ページ）**河**「寛、ひろき心也。地窄虚空寛」白氏文集。〔御芳野の大河水のゆほびかにあらぬ物から波のたつらん。

岷私云、何のこもりたる景もなく、海の面のひろき体、こと所に似ず面白し、と也。「いたりふかきくま」とは、手のこもりたるをいふべし。

拾ゆほびかに、寛大の心とは見ゆれど、引く所の六帖の歌より外には見えぬことば歟。然れば、その字と定むべからず。又「大河のべの」と引れたれど、現本「大川水の」とあり。現本よき証、下にいたりて見ゆべし。

新「万葉に「波のゆた」などいふに寛の字を用ゐしと思ひ合するに、ゆほびかも、ゆたかにひろきをいふと見ゆ。

釈此語、六帖三の歌を河海に引れたるより外には、大かた見あたりたることなければ、其心も又よく知れがたし。然れども、河海に「寛、ひろき心」と注せられたるよりこのかた、諸抄みな其意にのみ釈れたるは、いかにあるべき。さるは、かの「みよしのの大河水の」といふ歌のゆほびかには、全く寛大の意とは聞えざれば也。其故は、詞のつづき「ゆほびかにあらぬ」とあれば、ゆほびかならぬ意なること論なし。されば、これを寛大の意としては、不寛大ものの浪のたつらんといふこととなりて、其心聞えがたきにはあらずや。寛大ならず狭少なる所ならば、かの古歌に「浅きせにこそあだ波はたて」といへらんがごとく、波の立べきことわり也。然らば、「波の立らん」と疑ふべきにはあらざるべし。結局は、「など波のたつらん」とやうに疑ひたる例の辞なるをや。されば、これは中々に不寛大をゆほびかとはいふこととぞ聞ゆる。さては「ゆほびかにあらぬ物から」は、狭少ならぬものといふ意になりて、結局の「波の立らん」にかけあひて聞ゆるなり。かれ、仮にツンボリトシタと訳しつ。そのの頭書にもいへりしごとく、明石浦は前に淡路島ありて、海の面は広からず、いと狭りたる所なれば、かたがた寛大の意にてはかなひがたき事也。さて、右の歌の二句を「大河のべ」としたるは、湖月抄にのみ有て、河海には「大河水の」と引れたり。されば、拾遺にいへる引そこね給へるにはあらで、湖月の写し誤なることあきらけし。

御「雅集六帖三「みよしのの大河水のゆほびかにあふとはなしに浪のたつらん」とあり。四句「あらぬ物故」を「あふとはなしに」とせし本有と聞えたり。かくてはいよいよ不寛大意と聞えたり。

いつきむすめ 五丁ウ（翻刻一〇ページ）**釈**「いつき」は、神代紀に崇字を訓る意にて、忌清まはりて敬ひ崇ぶをいふを本にて、大切にする事に転しいへり。されば万葉集に「いはひ児」とよめるごとく、大切にしてみてもてかしづく女を「いつきむすめ」といへるにて、体言なり。をとめの巻に、「かぎりなきみかどの御いつきむすめも云々」ともあり。

さいなまるる 八丁ウ（翻刻一五ページ）**釈**「さい」は、河海の傍注に罪字を充られたるごとく、此字の音なるべし。なむは辭にて、いとなむ・たしなむなどのなむに同じ。又、河海に「事」「態」などの字を出して、日本紀・論語・文選など記されたるは、いかがあらん。此等の字の意はさらになし。例の暗記の語などにや。さて意は、ただ責はたることにいひて、俗にイチメルといふによくあたれり。

おくらす 十丁オ（翻刻一七ページ）**河**「おくらかす也」云々。

新「おくらす」は、古今に「かぎりなき雲ぬのよそにわかるとも人を心におくらさんやは、と出たる語也」云々。

釈この物語の中に「後らかし」といへる語あまたあり。それと同じ詞にて、俗にオクレサスルといふ意也。

あさはか 十七丁ウ（翻刻一八ページ）**河**あさくはかなき心歟。

拾今按、只あさきにて、は。かは「そこはか」などのごとくそへたる詞なり。万葉第十二に「紅のうすそめ衣あさはかに」、又「あらぞめのあさらの衣あさはかに」とよめる歌に、ともに浅の一字を「あさはか」と読り。

釈此拾遺の説のごとし。但、万葉の歌は、略解に「あさらかに」とよめるよろし。は。かも「かも」も形容辭ながら、意はいささか異なり。

さしくみに 十九丁ウ（翻刻三〇ページ）**拾**後撰恋四いにしへの野中の清水見るからにさしくむ物はなみだなりけり。かげろふ日記に、「人の家のまへちかきいづみに、八月十五夜、月の影うつりたるを女ども見る

ともいひて、虚語なり。「めもあやに」の「あやに」とは異なり。

釈新釈の説、あやを紋より出たるやうにいはれたるのみはよろし。見る目も文有てうつくしき意と聞ゆ。

さだすぎ 二十六丁ウ（翻刻四一ページ）**拾**「さだ」は、河海に央の字を出し給へり。なにに見えたる字にか、おぼつかなし。万葉十一に、へ人間守あし垣ごしにわぎもこをあひ見しからにこそ左太おほき、へおきつ浪へなみのきよる左太の浦の此さだ過てのちこひんかも。此後の歌は第十二にもいれり。初のうたにつきて按するに、「さだ」とは「ころ」といふ心と見えたり。さて「ころ」とは「此ころ」の心なり。此物語に「なかさだのすぢ」などあるは、中頃なり。「年のさだ過たる」とは、よきころほひを過る心也。央の字は、かなひても見えぬ意也。

釈大かた此説のごとし。「さだ」は「定」の意にて、よきほどの定りたる時をいふ。人の噂するをいふも、いひ定むる意なり。これにていつこもたがはず。

なげの御ことは 三十七丁ウ（翻刻五七ページ）**拾**後撰「こののははなげなる物といひながら思はぬためは君もしるらん。六帖「あはれをはなげのことばといひながら思はぬ人にかくるものかは。兼盛集「こののはをなげなる物とおもひせば何かは人のつらくしもあらん。

釈「なげ」は無氣の意にて、俗にナササウナといふ意なり。さてその無氣なるは、物の真の無氣なるをいふことと聞ゆ。かの「ぐれなばなげの花の陰かは、とよめるも、暮なば無氣になる花の陰かは、といへるにて、これも同じ意より出たるなり。ただ末のつかひざまのいささかかはれるのみなり。

よにしらぬ 三十九丁ウ（翻刻六〇ページ）**釈**此世中にはいまだ見も聞もしらぬ、といふ意也。すべてめづらしき事、うつくしき事、いみじき

ほどに、おほちにふえふきてゆく人あり。雲ぬよりこちくの声をきくなべにさしくむばかり見ゆる月かげ」。

玉拾遺に云々。此蜻蛉日記の歌によれば、涙といはでもさしくむといへは、涙のさしくむ也。然ればこの歌も、初二句さしくむ涙に袖ぬらしけるにて、源氏君の歌の四の句のこと也。さて下句は、花鳥に「山にすめる身は心もさわがぬ」といへる也云々。

余真淵云、後撰の歌は、目に涙さし含むことを水をくむにいひよせたり。蜻蛉日記に「さしくむばかり見ゆる月影」とあるも、手にくみて見るばかり月のただちに見ゆると、おなじく水によせていへり。このも、これらをとりにて水に寄たり。されども、此語のものはさし含を略せりと見ゆ。さて「さし」てふ語も、さしあたり・さしつけなどいふ時はただちなる意あれば、物をただちにはかなる意にいふなりけり。今のも「瀧波の音を聞とさしつけに袖ぬらす」とよめりと聞ゆ。此さしくみ云々の歌を同君の歌などいへるは、わろし。僧都に疑ひなし。○雅望考るに、袖ぬらしける山水とは、多武峰少将物語に、昔より山水にこそ袖ひづれ君がぬるらん露はものかは。さしくみとは打つけといへるにちかし。やどり木の巻に、「宮もあながちにかうすべきにはあらねど、さしくみは猶いとほしきを」と有など思ふべし。

釈此詞、さしつけに・うちつけになどの意といへる説は、よろし。さて詞のものは、いかなる意ともしられがたし。さし含の略とあるもいかがあらん。猶考ふべし。

めもあやなるに 二十丁オ（翻刻三三ページ）**余**真淵云、あやなしとは、織物の紋のあざやかならぬより出て、万の事に転じていへる、そのごとく、是は紋の鮮なるより出て、うつくしき物にいへり。万葉に「あやに恋しき」といへるも、鮮なる方にていふ也。朗云「あやに」は「あなに」

事にいひならひて、皆甚しき意也。

よしばみ 四十一丁ウ（翻刻六三ページ）**釈**「ばみ」は形容辭也。よしは、「よしあり」など云よしにて、上品に奥ゆかしきをいふ詞也。

○末摘花巻語釈

こりずまに 一丁オ（翻刻六六ページ）**河**「こりずまに」又もなき名は立ぬべし人にくからぬ世にしすまへは古今集

新是は「こりずまに」の意にて、まは添たる詞と誰もいへり。万葉巻十五に「中臣宅守か遠き任にまかりたるに、茅上姫子がよめる。へぬばたまのよる見し君を明るあした安波受麻爾して今ぞくやしき。此安波受麻爾の麻を添たる辞とする時は、「こりずま」も「こりず」てふ詞と聞ゆ。されど猶思ふに、不逢妻の略ならむと覚ゆる也。しからば、古今なるも「こりずつま」を略せし詞にや。古へ、夜逢を夜妻、朝にみるを朝妻などの語多ければ也。

湖師夕顔上の事のさまさまの物思ひに猶こりずして也。

釈新釈の説よろしきを、「不逢妻の略ならん」とあるより下はみなひがこと也。さる詞あるべしやは。論するにも足ねば、さしおきつ。湖月師説はよろし。随ふべし。※次の「けしきばみ」と本文登場順が逆。

けしきばみ 同（翻刻六六ページ）**玉**俗に気持があるといふ意の詞也。

釈ばみは形容の辭にて、気色をたてて見るさまをいへる也。さて案にこの「けしきばみ」といふ詞は体言にて、次の「いとましき」といふ詞に對へたる句法と見えたり。さらでは「打とけぬかぎりの」とあるのもじ、穩かならず。「けしきばみ」にて句を切てよむべし。「打とけぬかぎりのけしきばみ」と「心ふかき方の御いどましき」と、四句一對の文法也。心をつけてよみあぢはふべし。さて「打とけぬかぎりのけしきば

み」とは、源氏君のかよひ給ふ御かたがた、いづれも心をゆるさず、打とけずして氣持を見するをむねとし給ふを云。「心ふかきかたの御いとましさ」とは、いづれも心ふかくおくゆかしげに見せんとて、劣らじとて上べをつくるひかざりて、吾はと思ひあがり争ふをいへる也。

かたじけなしと思へど 四丁才（翻刻一〇ページ）拾「かたじけなし」は、はづかしきなり。物などを得て「かたじけなし」といふは、俗に過分といふことく、無徳なる身をかへりみればこの物を賜はるとははづかし、といふ心也。

評「かたじけなし」に辱字などを当たるは、此拾遺の説のとき意也。されど物語文どもにつかひたる意は、さらに然らず。みな俗にアリガタイ・モッタイナイ・オソレオホイなどいふ意也。こは、命婦が打とけてすむ所に源氏君を置奉りたるは、うしろめたく氣にかかりて、且は恐多く勿体なく思ふよしなり。拾遺ひがことなり。

こまぶえ 八丁才（翻刻一六ページ）拾和名抄云「簫云々。此笛の事歟。但、かかるもの吹べき物ともおぼえねば、常の笛を高麗より作りて来たるをいふか。

釈此説いかが也。高麗笛は、もとより舶來に用ゐたる笛にて、今の樂家にもふくもの也。いかに思ひ混へてかくはいはれつらん、いぶかし。**さまあしからんなどさへ** 九丁才（翻刻一七ページ）湖わが心ながら

も、世の聞えもおもはぬほど思ひしむべき、と也。**釈**この意は湖月のことし。但「さまあしからん」といふ詞は、たた様体のわるき事のみなるを、ここにては深く心の迷ふる方に転し用ゐたり。さるは、心のまよひて、我ながらも様のあしきやうにおもはるるほとに、といふ意なる故に、しか転したるにぞあるべき。

よづかず心やましう 十一丁ウ（翻刻二〇ページ）湖世人に似ずつれ

なき心也。

釈此説たがへり。惣て「よづかず」とは、男女の間の世をしらす著なきをいふ詞なるを、こは末摘花君へしばしばいひやり給へど、いつまでも猶おぼつかなくのみありて返事なき故、案外に男女の情を知ぬ人のこちして、心やましうおぼすよし也。さらに世人の世にてはあらず、ひがこと也。

いなびぬ 十五丁才（翻刻三五ページ）河いなともいはぬ心歟。**孟不辭退**、さすがに人の申事は聞給ふ、と也。

釈注のごとき意なるは、いふも更なり。さて此詞、「いなまぬ」など有べきを、いなびぬとあるは、詞の八ちまたにいはゆる中二段の格にて、いなび・いなぶ・いなぶる、とはたらく類の詞也。心得おくべし。

こころげさう 十五丁才（翻刻一六ページ）**釈**此詞は心「繫想」の意にて、うつくしき人などを見て、いかで我に思ひをかけよかしとやうに思ひて、よろづ引つくるひ、心にくきさまして、人の思ひかくるをした待つ意にいへり。故、心「化粧」の意にやとも思ひしかど、化粧といふは古からぬ詞なれば、なほ「繫想」の意にて、心中に人のけさうするをまつ意としられたり。

ししま 十六丁ウ（翻刻一七ページ）拾無言・進退、両説の中に、無言を用へし。其故は、小侍従か返歌に其証、明か也。日本紀に棲遑・進退をししまひと点したる所なければ、其義かはれり。※後半、原文には「日本紀に棲遑をも進退をもししまひとよみて、只し、しまと点したる所なければ、其義かはれり」とある。

余し。まとは、口をししめをるよりいひけるなるべし。**河**日本紀曰、唯咽進退、一泣懷愴、無所訴言、垂仁天皇巻。又曰、棲遑不知其所第七。此事秘説有。

やなき」はワケモナウ、ラチモナイ事也。

釈右の説、いづれもよろし。必しも絹の事にはかぎらねど、あやは文の意なる事はたがはず。文のなきは、埒もなき意より、わけのなき事にいへる也。

そそや 二十四丁才（翻刻三八ページ）湖師おどろく心也。「すはや」など云心也云々。驚破と書。新古今の歌に「そそや。木枯けふ吹ぬ」といふ類なるへし。

余考るに、驚破の字そそやとよめる、白氏文集長恨歌の点に出たり。真淵翁はこれを忘れて、かく書てそそよとよめることなし、と新釈にせるされたり。木枯の歌は、「高円の野路のしのはら末さわき」と有て、新古今集秋上に有て藤原基俊の作なり。蜻蛉日記に「あなたに人の声すれば、そそなどのたまふに、ききも入ず」。東野州聞書「そそや、是は『なぞ』『なにぞ』など申詞同事也。招月の被申候は、そそやと云詞は『すはや』と云やうの詞也」。夫木へこも枕高瀬のよどにたつ鳴のおともそそやとあはれなりけり顕昭。

さらばひて 二十六丁才（翻刻四一ページ）河髭莊子。やせつまりたる也。**余**髭の字、莊子至樂篇に見えたり。曰、「莊子之楚、見空髑髏髭然有形」。注「髭然、空虚而堅固之貌」とあり。音哮、白骨貌ト釈文二見エタリ。

なほなほしう 三十三丁ウ（翻刻五〇ページ）**釈**「なほ」は、「ただ」といふに同じ。凡なる意也。平人を「ただう人」とも「なほ人」ともいふ「なほ」の義に同じ。さて二ツ重ねいひて繁といふ形容辭にて活かせるなり。すぐなる事にはあらず。まがふべからず。

くはや 三十五丁ウ（翻刻五二ページ）余かかり火の巻に「人のあやしと思ひ侍らんことぞわび給へば、くはやとていて給ふに」。後撰集恋四ひ

きまゆのかくふたごもりせまほしくは。こきたれてなくを見せばや。

あらず 同ウ（翻刻五三ページ）**新聞**に答へて「しかはあらず」てふを略して「あらず」とのみいふ、常の事也。古今集に「春きぬと人はいへども驚のなかぬかぎりはあらずとぞおもふ、てふ「あらず」も是なり。

余清少納言に「『なに事ぞ、なりまさがいみじうおぢづるは』ととはせ給ふ。『あらず、車のいらざりつるといひ侍る』と申ておりぬ」。宇治拾遺に「『あな、あふなのめぐみや』といひたりけるを、めくら取もあへず、『あらず、鼻くらなり』とぞいひたりける」。此外あまた見えたる詞也。朗云、此詞はやく空蟬にあり小君詞。その本居説に、イヤ何テモナイと云今の俗語に当たるといへり。

たをやぎ 三十七丁ウ（翻刻五六ページ）**釈**「たを」は「たわ」と通ひて、和らかなる形をいふ。「たをやめ」「たわやめ」など猶多し。やぎは形容の辞にて、「若やぎ」などの「やぎ」におなし。

ひいな 三十九丁ウ（翻刻五九ページ）**余**崇神紀歌「比売那素寝公望」。私記曰「言不_レ知殺逆之謀為_二兒女之遊_一」。今案、比々奈遊也_{（釈日本紀）}。かくあれは、ひひ_・な_・の仮字を用ゆべし。

釈契沖雜記「雛ヒヒナ、ひひはひひと聞ゆるこゑ、なは鳴か」とあり。これ鳥の雛をいふ言の本義なるべし。又玉かつま十に云、「人の形をちひさく作りて、わらはのもてあそぶ物を、物語ふみともにひひ_・なといへり。これはちひさくつくれるを、鳥のひなになずらへていへる名にて、字も雛とかき、今の世の人もひなといふを、ふるくひひ_・なとしもいへるは、詩歌をしいか、四時をしいじ、女房をにようばうといふたぐひにて、ひもじを引ていふなれば、仮字はひひ_・なと書べきを、おと書るはたがへり。物の雛形といふも、ちひさく物したるよしの名なり」と有。今按に比々奈を切めて比奈といへるを、さらに引てひひ_・なといへるなるべく、

さわくきぬのおと、木丁などの音に云々。今やそきやむと、物いはずつくつくとお給へは」。同「若君おはしてそきありき給ふを」。

釈雅集になほ引たれと、すこし心の異なるもあれば、今ははぶく。何事にまれ、いそがはしくもてあつかふ意也。こも紫の上の、他事をはさしおきてひひなをとく取出して、いそがはしくつくるひあつかひ給ふさま也。「そめく」とは同語ながら、少し意異也。訳は其所のふりに随ひて物すべし。

うけはしげに 十四丁ウ（翻刻三三ページ）**河孟**呪咀。のろふと云心也。**拾**今按、日本紀に呪の字「かしり」、咀は「とこふ」と読て、「うけふ」とよめる事なし。誓の字、祈の字をうけふとよめり。万葉にも祈の字をうけふとよめり。日本紀・古事記の意は、善惡につけて祈るをいふ。かならずのろふにはかざるべからず。

釈此語、本は紀記の意なれど、転りて此物語などの比は河海の字の意にて、のろふ事也。さるは、神に祈りてのろふより意のかはりたるものなめり。伊勢物語に「罪もなき人をうけへはわすれ草おのがうへにそおふといふなる、うつほ国ゆつりあなかもや。かの君の云々、うけひのろひはせんとて、など皆此意也。うけひのろひと有にて、さる意をしるべき也。なほ此物語にも数多見えたり。みなその意なり。

ひとま 十五丁オ（翻刻三三ページ）**拾**日本紀に間の字をひとまとよめり。ひとまといふは此略語歟。ここにては人のなきまと聞ゆれど、貫之の「梅の花いつのひとまにうつろひぬらん」といふも、必人まとは聞えぬにや。**余**朗云、此歌もやはり人間として聞ゆ。

釈鈴木氏の説よろし。人間の意也。訳人ノ見ヌマ。**御ころの鬼に** 同ウ（翻刻二四ページ）**花**心の鬼とは、心におそろしく思ふ事也。謙徳公集「我ためにうときけしきのつくからにかつは心のお

比々奈の下の比を音便に伊の如く訛れるにはあらざるべし。しか定むる故は、比々奈といふ言、比二ッ重れるを、比伊などはいひうつしがたく、比奈とは直に切り安ければ也。されば、仮字は玉かつまに随ひつ。

あへなん 四十一丁オ（翻刻〇〇ページ）**余**案に、「あへなん」といふ詞、うつぼ物語国ゆつり下に「あしかるべくは、おそろしき物の中にすてたりともあへなん。ただ神仏にまかせ奉る云々」。又同卷「この御爭の琴はいとよくなりぬべし」といへば、『あへなん』とて御かへりもなし」。柏木巻に「御とがあることはあへなん。ふたついはんには、女の御ためこそいとほしけれ」。蜻蛉巻に「『すぎたる物きたるは、ばうそくにおほゆる。ただいまはあへなん』とて、てつからきせ奉りたまふ」。

○紅葉賀巻語釈

けざやか 八丁オ（翻刻二四ページ）**拾**河清万葉。今按、万葉に清の字、さやかとはおほくよめど、けざやかとよめる事なし。氣清と書べき也。**新**此説は氣鮮の意なるを、ここには外様の人めきたるもてなしてふ意にとる。或説に、清を万葉にけざやかとよみしやうにいへるは、例のそら言也。清字をさやかとは古書によみたれど、上に「け」の語をそへたる事なし。此けはけしきの事なれば、付ていふべきにあらず。

釈氣鮮は猶いかが。氣清の方、此語の本の意也。

訳サツハリ。ハツキリ。リツハ。けざやぐと活かしてもいへり。同意なり。**そそぎ** 十丁ウ（翻刻一七ページ）**岷**聞書、そそめく也。あつかふ心也。をさなき人のあそぶ体なり。

雅集帚木「西おもてのかうしそそきあげて、人々のそくべかめり」。鈴虫「わかき尼君たち二三人、花奉るとてならず云々。さまかはりたるいとなひにそそきあへる、いと哀なるに」。狭衣「立さまよひつくるひ

にも見えたり

余枕冊子「心の鬼いできていひにくく侍なん物を」とあり。紫式部集「なき人にかごとをかけわづらふもおのが心のおににやはあらん。谷川士清云、「列子注に疑心生闇鬼」と見えたり」。正法念経に「闇羅獄卒、非_二実有_レ情_一、以_二衆生妄業力_一故見_レ之」とあり。按ずるに、列氏を引たるは林希逸が注文なり。

くねくねしう 二十二丁オ（翻刻三三ページ）**新**古今集序に「女郎花の一時をくねる」といへる詞、他には見えず。此「くねくねし」といふにあはせて知べし。

余東屋の巻に「母なる者も、是をこと人に思ひわけたるごとくくねりいふ事侍りて」。おちくほ「いみしうくねりためるは」。沙石集三「老ひがみてくねりはらたちて」。

釈古今序の「くねる」は別に論あり。余滴に引る「くねり」とは同意也。意は、恨むるにも責るにもまほにはいはずして、ひがめゆがめて腹あしくいふやうなる意也。俗にウネル・ゴネル・グズルなどいふに近し。こも源氏君に対してかよひ給ふ女がたの、人の物にかちよせて事々しく恨むるを、くねくねしうと形容にいへるなり。

をこ 三十二丁ウ（翻刻四五ページ）**新**をこの者とは、異国の一所の名にて、その人はよろづわるかるによりて、ここにもすべて心にもすがたにもひがみ見くるしきをいふ事とはなりつらん。

余古事記に袁許と書、日本紀に于古とあれど、もと此国の語にてはあらず。唐ざえのつきて後、かうやうの語を常にいひならひたる也。紀記ともに後世になれる書故、からぶりの詞もおのづから入たるなるべし。谷川士清か説に、「をこはもと国の名也。後漢南蛮伝に烏訢の人の事委く見えて、笑はしき事多かりといへり」。

〔**釈**〕右の説ともいたくひがこと也。烏^ヲ譚^コといふ蛮国のならはしの笑はしきとて、其国の名を係て笑はしきを烏譚といはんは、いと物遠きことなるに、漢国にてだにさはいひならさぬ物を、まして御国にていふべしやは。そはとまれかくまれ、応神天皇紀に見えたる歌の語を「からざえのつきて後云々」といへるは、更にあたらず。漢才などいふは、漢籍行はれて後こそいはめ、かの御世にわづかにわたり始たる漢籍の語を、さながら其世にいひならはめや。よしならひたりとも、歌によまめやは。日本紀などの訓点などならばこそ「後世になれる書故云々」ともいはめ、歌は其御世御世の人のよめるなれば、此ちやうにはあらじをや。いかにまがへてかくはいひけん、いといといぶかし。応神紀に「伊夜袁許爾斯^ニ弓」と見えたるは、正しき皇国言の証とすべし。さてをかしといふ語は、此をこを活かして転じたる也。

訳 バカ。アホウ。「をかし」は、バカラシイ。アホウラシイ。

〔**ほとほと**〕 同〔翻刻四六ページ〕拾^{ホトト}孟^{ホトト}殆^{ホトト}なり。今按、上の「と」をすみ、下の「と」を濁るべし。「ほとほと」とは、あやふき心なり。歌にしかよめり。「あふなく何せんとしつる」など俗にいふ、是にかなへり。「程々し」とよめるは、程をふる心にて、ことなり。

〔**余**〕万葉巻の七旋頭歌^ヘみぬさ^ヘとるみわのは^ヘふりがいはふ杉原たきぎきりほとほとしくもてをのとられぬ。万葉八^ヘ我宿の一むら萩を思ふ子にみせでほとほとちらしつるかな。

〔**新**〕万葉に「ほとほとしくも成ぬ」とよみたるは、事の顯はれんに迫れる意也。然れば、殆の字を訓はよくかなへり。殆は危近き意といへり。さて「ほとほと」は本也。ほとんどと訓は音便のみ。万葉巻の十五に、中臣宅守の遠き国に在を、姫子がまつ心をよめる歌に、^ヘかへりける人來れりといひしかば保等^{ホト}保等^{ホト}之爾吉君^ニがとおもひて、是はとどとどと胸

○花宴巻語釈

おくしがちにはなじろめる 二丁オ〔翻刻六ページ〕細臆^ホしたるさま也。

〔**雅集**〕鼻白むなるへし。○俗のシラケルといへるも、語意同じきか。下りたる代の軍物語にも、クロミワタルといへるは、胄をうつむけて敵にむかふ勝軍の勢ひをいひ、シラクルは、あふむきて肩軍の体也といへり。〔**秋**〕花鳥に「鼻のうへがしろしろと見ゆる也」とあるは、いとふるくよりいふ言なれど、いかにあらん。いかさまにも臆したるさまとは聞えたり。

なほあらじに 五丁オ〔翻刻二一ページ〕湖師^ホ猶かくのみにてはあらじと思ひ給ふ心に、と也。

〔**秋**〕大かたかくの如し。ただはあらじといふを体言にしたる也。拾^ホ細^ホなほあらじとことなしぐさにいふことを聞しれらくはすくなかりけり万葉七默然不有^{ナホアラジ}○今按、此引歌、今の本には「もだあらじとことなぐさに」とあり。事^{コト}之^ノ名^ナ種^タ爾^ニと書たれば、胸の句は誤なり。古点にはなほ^{ナホ}あらじとよみけるにや。蜻蛉日記などにも此詞あり。しかれども彼集中此詞おほきに、もたと仮字にも書たれば、今の点叶へり。直の字だ^ナともなほともよめば、「なほあらじ」は「ただにはあらじ」也。或注に「猶かくのみにてはあらじと思給ふ心」とあるは、違へるにはあらねど、よく心得られたるにはあらず。

〔**雅詠**〕其分デハオクマイトイフキデ。

すさめぬ 七丁ウ〔翻刻一五ページ〕河^{スサメヌ}不肯^{スサメヌ}万葉

拾^{スサメヌ}今按、万葉に此詞なし。

〔**秋**〕拾遺に「万葉に此詞なし」といへるはいかに。おのが見たる本には

のさわく也。

〔**秋**〕拾遺にいへる清濁の説、わろし。皆清てよみべき事、万葉の仮字にてもあきらか也。意は殆の字の如く、大かた其事に及ばんとして未^タ及^ハ、危きほどの心にいへり。ここともふき出して笑はんとして、こらへて笑はぬやうの意也。

〔**雅詠**〕過去の時 モチツトテ。ステノコトニ。現在未来の時 トウヤラ。ワルウシタラ。殆の字をホトンドとよむ、即是也。殆はアヤフキ意、チカキ意なり。

すまふを 三十二丁ウ〔翻刻四七ページ〕拾^ホ遊仙窟、推の字・禁の字を、ともに「すまふ」とよめり。

〔**秋**〕此説はいかが也。打まかせて此字の意にはあらず。すべて漢籍の訓は、あたるとあたらぬとあなるを、よく思ひ定めて、いつこへも当るをのみ引べき事也。此詞は、俗にイヤガリテセヌといふ意にて、さはすまじと争ひいとむ意也。

おもなのさまや 三十三丁オ〔翻刻四八ページ〕拾^ホ日本紀に安措を「おもなし」とよめり。面目なく恥かしき心也。

河^ホ無^ホ面^ホ也。

〔**細**〕面つれなき事をおほす也。

〔**新**〕今按、万葉に「暮に逢てあした面無^{オモナ}み云々」といふに同じ意を朝面^{アシタオモ}羞^ハともかきたる所あれば、面はぢする事也。さていせ物語に「面無^{オモナ}ていへるなるべし」といへるは、只にはぢていふにはあらて、面なき事も忘れて猶面つよくいく度もいふ也。今もその如く、面無かるべき事をさも思はで内侍のいひおこせし故に「おもなのさまや」とはのたまふ也。かく他の事をこなたよりいふは、傍^{カタハラタ}痛^タきてふ詞の用ぬざまなどに多き事也。

「不肯」に「日本紀」とかかれたり。よしやそは、とまれかくまれ河海には、スサメヌには「不愛の心也云々」と釈れたる、大かたにはかなふべし。只俗にトンヂヤクセヌといふ意にて、たがふことなかるべし。又雅言集覽に例多く挙げたれど、少しばかり引出たり。委しくは本書を見るべし。

〔**雅集**〕元真^ヘ足柄の山にしける玉こそすげ行かふ人もすさめざりけり。後春下^ヘ谷さむいまだすだたぬ鶯のなく声わかみ人のすさめぬ。後拾^ヘ香をとめてとふ人あるをあやめ草あやしく駒のすさめざりけり

〔**雅詠**〕賁^ハ断セヌ。駒^{ウマ}もすさめずかる人もなし。又、人に見すてられたる事を「すさめられたり」といふは、後に転じたるなり。

ふさはしからず 十四丁オ〔翻刻二四ページ〕拾^ホ河^{スサメヌ}不詳^{スサメヌ}日本紀○今按、日本紀に不詳を「さがなし」とはよめり。「ふさはしからず」とよめる事なし。「ふさはしからず」とは、俗に相応するをいへり。神代よりある詞なり。古事記八千弋神御歌云、「奴麻多麻能^{ヌマタマノ}云云、許礼婆布佐波受^{コレハハス}云云、許母布佐波受^{コモフサハス}云云」。この中のふたつの布佐波受も、俗にいふと同じ心に聞ゆ。又万葉十八に、大伴池主、おなじき家持より針袋のをかしきを与て、鳥か鳴あづまをさしてふさはしにゆかんと思へどよしもさねなし。これもふさはしきにゆかばやとおもへど、行べきよしなしと読る歟。

〔**雅集**〕夕霧「ふさはしからぬ御心のすぢとは、年ごろみしりたれど、さるべきにや、むかしより心にはなれがたう思ひ聞えて」。ヤドリ木「源中納言のいたうすすめ給へるに、宮すこしほは糸み給へり。わづらはしきわたりをと、ふさはしからずおもひていひしをおほし出るなめり」。カケロフ「たいの御方の、かの御ありさまをふさはしからぬ物に思ひ聞えて」。

〔雅訳〕似合ヌ。相応セヌ。

おほどけ 同ウ（翻刻二七ページ）〔雅集〕おほどか○俗に大ヤウト云ルニ同シ。○「おほどけ」も同じ。帚木「おほどかにことえりをし」。椎か本「何ごともあるにしたがひて、心をたつるかたもなく、おほどけたる人こそ云々」。竹川「いとわかやかにおほどいたるここちす」。夕顔「人のけはいいとあさましくやはらかにおほどきて、ものふかくおもきかたはおくれて」。

〔釈〕おほどけ・おほどか同じきよし、雅言集覧にいへり。按に、おほどき・おほどか、又同じかるべし。各所によりて少しづつのけぢめはありと見えたり。

〔雅訳〕天やうにくだくだしからぬ心なり。大サヤカ。アトナウトリシマラヌ。